

氏 名 : 張 愛子
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第280号
学位授与年月日 : 平成28年9月27日
学位授与の要件 : 学位規則第4条第1項該当 課程博士
学位論文名 : 大学生の「生きづらさ」に関する日中比較研究
論文審査委員 : (主査) 教授 新倉 涼子
(副査) 教授 中下 富子 教授 長澤 成次
教授 松井 智子 教授 坂西 友秀

学位論文要旨

本論文では、誰でも経験する現代社会の「生きづらさ」の背景に、社会的価値の内面化と自己実現的側面のミスマッチによる社会化の困難があると想定し、それに個人的要因と社会変化による社会文化的要因が関係するという理論的枠組を設け、とくに深刻な状況を呈しつつある若者たちの「生きづらさ」問題のメカニズムの解明に取り組んできた。本論文では、まず「生きづらさ」に関する先行研究を概観するとともに、「圧縮された近代化」が進められた日中社会の「生きづらさ」の文脈を整理し、若者たちの「生きづらさ」を捉える理論的枠組みを構築した。次に、本論文における「生きづらさ」の理論的枠組みに基づき、日中の大学生を対象に実証研究を行い、「生きづらさ」の構造について比較検討を行った。本論文で得られた成果は以下の通りである。

序章では、本論文の背景と理論的仮説を立て、本論文の目的と論文構成を示した。

第1部第1章では、「生きづらさ」に関する理論的考察を通して、「生きづらさ」の概念を捉える枠組みと概念定義を行った。これらに基づき、排除の構図のもとで生じる「生きづらさ」について、承認というキーワードで捉えることを提案するとともに、さらに「生きづらさ」を相互関連する3つの次元、自己・集団・社会次元の否定的な自己関係から捉えることを提案した。

第1部第2章では、社会化を困難にする「生きづらさ」の社会文化的要因について検討した。「圧縮された近代化」が進められてきた日中社会における社会化の指向性の変化を検討し、それゆえ生じる社会的価値の内面化における矛盾を指摘した。

第1部第3章では、若者たちの社会化を困難にする要因について検討した。社会的価値の内面化という視点から、日中社会の学力観における社会統合機能の限界が社会的排除を生み出し、彼らの「生きづらさ」を生じさせているという要因を指摘した。加えて、社会化の自己実現的側面

という視点から、青年期における自己愛傾向の高揚が若者たちの自己形成を妨げ、自己像をめぐる「生きづらさ」を生み出しているという個人差要因を指摘した。

第1部第4章では、理論的研究で得られた知見に基づき、青年期を対象にした実証研究における目的を示した。

第2部第1章では、「生きづらさ」の概念的枠組みに基づき、日中大学生に対する実態調査を行い、その結果を参考に「生きづらさ」感覚尺度を作成し、因子構造について日中比較検討を行った。分析の結果、日中大学生の「生きづらさ」感覚は、日中ともにそれぞれ自己・集団・社会次元の3つの次元の否定的な自己感覚により構成されるもので、相互に低～中程度の相関を示しており、本論文における「生きづらさ」の概念的枠組みを支持する結果となった。ただし、日中大学生の「生きづらさ」感覚がやや異なる自他境界を基礎としていることから、中国大学生の「生きづらさ」感覚が日本のそれとは異なった特徴を示唆するものではないかと考察された。

第2部第2章では、「生きづらさ」に関する理論的枠組みを基に、日中大学生の「生きづらさ」を規定する要因として承認要因、発達の個人差要因、社会文化的要因を取り上げ、日中比較を行った。その結果は以下の通りである。

第1に、日中大学生の「生きづらさ」を規定する共通要因に関して、承認要因に関しては、「劣等感」が日中大学生の3つの次元の「生きづらさ」感を増大させているという結果であった。個人差要因に関しては、過敏な自己愛傾向が日中大学生の3つの次元の「生きづらさ」感を増大させ、誇大的な自己愛傾向は日中大学生の3つの次元の「生きづらさ」感を軽減させた。第2に、日中大学生の「生きづらさ」を規定する要因の違いに関して以下の結果が得られた。日本では、社会文化的要因の「競争性」が「劣等感」を介して「生きづらさ」を軽減させた。中国では、社会文化的要因の「功名志向的倫理観」が「劣等感」を介して、「他者からの評価」と「外見的魅力」が「劣等感」「道具的依存傾向」を介して「生きづらさ」を増大させた。また、3つの次元のうち、少なくとも1つの次元の「生きづらさ」に影響を与えた要因に日中での相違がみられた。(1) 自己次元の「生きづらさ」：日本の場合、承認要因では、「他者協調傾向」「自己主張傾向」が「生きづらさ」感を軽減させた。社会文化要因では、「競争性」「他者からの評価」が「自己主張傾向」を介して、「家族・友人からのサポート」「関係性維持」が「他者協調傾向」を介して「生きづらさ」感を軽減させた。一方、「競争性」「他者からの評価」は「他者協調的傾向」を介して「生きづらさ」感を増大させた。中国の場合、「功名志向的倫理観」が「生きづらさ」感の増大に直結していた。(2) 集団次元の「生きづらさ」：日本の場合、承認要因では、「積極性・粘り強さ」が「生きづらさ」感を軽減させ、「依存傾向」が「生きづらさ」感を増大させた。社会文化要因では、「競争

性」が「依存傾向」を介して「生きづらさ」感を軽減させ、「外見的魅力」が「積極性・粘り強さ」を介して「生きづらさ」感を増大させた。また、「関係調整的倫理観」が「生きづらさ」感の増大に直結していた。中国の場合、承認要因では、「情緒的依存傾向」が「生きづらさ」感を軽減させた。社会文化的要因では、「功名志向的倫理観」「関係性維持」が「情緒的依存傾向」を介しては「生きづらさ」を軽減させた。(3) 社会次元の「生きづらさ」：日本の場合、承認要因では、「他者協調傾向」が「生きづらさ」感を軽減させた。社会文化要因では、「関係性維持」「家族・友人からのサポート」が「他者協調傾向」を介して「生きづらさ」感を軽減させ、「競争性」が「他者協調的傾向」を介して「生きづらさ」感を増大させた。中国の場合、承認要因では、「情緒的依存傾向」が「生きづらさ」感を軽減させ、「道具的依存傾向」が「生きづらさ」感を増大させた。社会文化的要因では、「功名志向的倫理観」「関係性維持」が「情緒的依存傾向」を介しては「生きづらさ」を軽減させた。また、「功名志向的倫理観」が「生きづらさ」の軽減に、「関係性調和」が「生きづらさ」感の増大に直結していた。

これらは、当初、グローバル社会の競争的志向と従来 of 社会集団における連帯意識との間に生じる矛盾が、社会的価値傾向の内面化を困難にし、青年期の一時的な自己愛傾向の高揚が若者たちの自己形成を妨げ「生きづらさ」を生み出す、という仮説を概ね支持する結果であると考えられた。しかし、自他の境界や他者との関係に基づく社会文化的要因の違いは、社会化の承認次元を媒介してから、日中大学生の3つの次元の「生きづらさ」にやや異なる影響を与えていることも確認でき、日中大学生の「生きづらさ」は一概に言える困難ではなく、それぞれ3つの承認次元別に検討し対処していく必要があると考えられた。

終章では、理論的研究と実証的研究において得られた知見について総合的な考察を行い、今後の課題について述べた。